

# 僧院における日本語教育の現状調査と年少者向け日本語教室の実践 報告書

筑波大学人文・文化学群日本語・日本文化学類 建部祥世

## 1. はじめに一テーマ設定の背景と目的―

ミャンマーにおける日本語教育の特徴として、僧院学校でのボランティア教師による日本語教室が挙げられる。古くから地域社会に根差し、無償で子供たちに学ぶ機会を提供してきた僧院学校は全国各地に点在しており、その持つ可能性は非常に大きい。しかし、民間の日本語学校のように学習者からの授業料の徴収はなく、寄付やボランティアの支援によって成り立っているため、日本語を学習するための環境としては不安定であると考えられる。以上のことから、今回の調査では僧院における日本語教育の現状と課題を把握し、貢献の仕方について考察したいと考えた。

また、ミャンマーの初等・中等教育機関では英語以外の外国語教育が行われていないため、それらの教育機関に通っている子供たちが他の外国語を学習したり、他国の文化に触れたりできる機会はそれほど多くはないと予想される。しかし、幼少期の経験は成人を過ぎてからも印象深く残っていくものであり、子供たちの将来の可能性を広げることができるかもしれないと考える。また、言語教育は単に「言葉を教える」ということに留まらず、その背景にある文化を伝えることによって、子供たちの感性を豊かに育んでいくこともできる。筆者は、子供たちの多様な感性こそが、世界をより豊かにしていくものであり、日本語教育はその一端を担えるのではないかと考えている。筆者のこれまでの経験を生かして、ミャンマーのより多くの子供たちに日本語・日本文化を伝えたいと考えた。

## 2. ミャンマーの日本語教育について

ミャンマーにおける日本語教育は、1964年に現在のヤンゴン外国語大学に日本語学科が設置されたことに始まる。1997年にはミャンマー第2の都市であるマンダレーのマンダレー外国語大学に日本語学科が設置され、現在でも高等教育機関で日本語を学べるのはこれら2つの大学のみである。また、初等・中等教育機関で日本語を教えているところはないため若年層の日本語学習者は少なく、多くは高等教育機関入学後や学校教育終了後に学習を開始する場合が多い。彼らの多くは民間の教育機関や日本のNGOによる日本語教室、僧院などの学校教育以外の機関で学んでいる。こうした学校教育以外の機関はミャンマー全国に57機関あり、ヤンゴンには50機関ある。

(国際交流基金「2013年度日本語教育国・地域別情報 ミャンマー」参照)

## 3. ミャンマーの僧院について

ミャンマー全国に僧院は58345ヶ所、ヤンゴンには2940ヶ所あるという。これらの僧院には大きく分けて2つの種類がある。1つは専門的な活動を行う僧院、そしてもう1つはその他の活動を行う僧院である。そして、専門的な活動を行う僧院をさらに分類すると①教学僧院、②瞑想センター、③僧院学校の3つに分けることができる。

①教学僧院とは、若い出家者に対して専門的な仏典教育を行う僧院で、ヤンゴンには395ヶ所ある。②瞑想センターとは、出家者・在家者に対して仏教の瞑想を指導する組織であり、ヤンゴンには70～80ヶ所ある。③僧院学校とは、世俗教育を行う僧院である。正式な僧院学校は学生数も多く、

政府から学校として公的な承認を受けており、一般の初等・中等レベルと同等の卒業資格が得られる。また、一部の僧院学校は孤児院を併設するものもあり、世俗教育、仏教基礎教育、技能教育などが行われている。このような僧院学校は、ヤンゴンに 105 校ある。これとは別にヤンゴンでは「僧院塾」「僧院カルチャーセンター」と呼べるような活動を行う僧院が 1980 年代以降現れてきている。このような僧院では、外国語やコンピューターといった実学を教えており、ヤンゴンに 10 ヶ所ほどある。

以上のような専門的な活動を行っている僧院の教育は、基本的には無償で提供されている。僧院の経営は全て布施によって賄われているため、教師も皆ボランティアとして教えている。

(蔵本龍介 (2009)「ミャンマー都市部の僧院経営―上座仏教における出家者と社会の関係についての一考察―」参照)

#### 4. 調査日程

日程	場所	実施内容
2 月 21 日 (土)	成田発→ヤンゴン着	
2 月 22 日 (日)	マノーラマ僧院	日本語体験コンテスト入賞者に取材・観光調査・授業見学
2 月 23 日 (月)	マノーラマ僧院	授業実施
2 月 24 日 (火)	マノーラマ僧院	授業実施
2 月 25 日 (水)	スータウンピー僧院	日本文化紹介
2 月 26 日 (木)	スータウンピー僧院	日本文化紹介
2 月 27 日 (金)	スータウンピー僧院	日本文化紹介
2 月 28 日 (土)	マノーラマ僧院	調査・授業見学
3 月 1 日 (日)	WBMI マノーラマ僧院	調査・授業見学
3 月 2 日 (月)	マノーラマ僧院	授業実施
3 月 3 日 (火)	マノーラマ僧院	授業実施
3 月 4 日 (水)		日本語体験コンテスト入賞者に取材・観光
3 月 5 日 (木)	ダマラキタ僧院	調査・授業見学
3 月 6 日 (金)	ダマラキタ僧院	授業実施
3 月 7 日 (土)	マノーラマ僧院	交流 (日本人学生団体訪問のため)
3 月 8 日 (日)	ヤンゴン発→成田着	(9 日に成田着)

#### 5. 僧院における日本語教育の現状調査

ミャンマー人の日本語教師の方から聞いた話によると、現在ヤンゴンには日本語を教えている僧院学校が 25 か所ほどあるという。実際にバスに乗っている時も「日本語教室」と書かれた看板を掲げている僧院を見かけたことがある。今回は日本人のボランティアが教えている (または以前教えていた) という数少ない 3 つの僧院を訪問した。

## 5.1. マノーマ僧院

### ➤ 僧院

マノーマ僧院は 1997 年に設立され、当初は日本語・英語・中国語が教えられていた。その後、フランス語・スペイン語・ドイツ語・タイ語・マレーシア語・韓国語などの外国語のクラスや会計、コンピューターのクラスなども設置されるようになった。現在、ボランティア教師は 25 名おり、学習者は主に学生や会社員で、3000 名ほどいるという。授業は月曜日から日曜日まで毎日朝 7 時から夜 7 時まで行われており、1 回の授業は 1 時間半～2 時間ほどで、期間は 3 か月である。

マノーマ僧院は外国語を勉強できる僧院としてヤンゴンではとても有名なようで、日本からの学生団体などの訪問も多く、交流も盛んに行われているということだった。

### ➤ 日本語の授業

日本語の授業は初級から中上級までの文法クラスや会話クラスがあり、時間は月曜日と火曜日の午後、土曜日と日曜日の午前と午後である。平日の授業は学生や求職中の学習者が多く、平日は会社員の学習者が多い。学業や仕事などで来られない場合も多く、学習者は都合の良い日に同レベルの別の日本語の授業に飛び入り参加するなどしている。特に課される宿題やテストなどもなく、また出欠も確認されないため、自由度が高い。中上級の学習者でも文法をもう一度勉強したいと思った場合は、初級の授業に参加していることがあった。

授業は基本的に、教師が教科書のダイアログの文法や意味を解説するといった講義形式である。特に初級の場合は学習者が多いため一人一人発話する機会がなく、全体コーラスに留まっている。中上級になると人数が少なくなるため、教科書のダイアログのロールプレイや教師とのインターアクションの機会も増える。中上級クラスの担当教師は、「日本語能力試験に合格しても話せなければ役に立たないから、授業では話すことを重視している」と言っていた。そのため、前半は教科書の文法・内容理解にあて、後半はスピーチを発表してお互いに評価し合う、教師がミャンマー語で出題した文章を学習者が日本語で答えるといった授業が行われていた。

### ➤ 教科書

教科書は教師によって使用するものが異なっている。初級では、ヤンゴン市内の日本語学校やヤンゴン外国語大学の日本語学科などで使われているオリジナルの教科書が使用されている。これは、担当の教師が民間の日本語学校に勤めていたり、ヤンゴン外国語大学を卒業したりしているためである。中上級では、国際交流基金の「エリンが挑戦！にほんごできます。」が使用されている。これは、担当の教師が国際交流基金の教師研修で日本へ行った際に、国際交流基金からこの教科書のシリーズを贈呈されたためである。なお、教科書はコピーしなければならないため、コピー代のみ学習者が負担している。

### ➤ 教師

日本語を教えているミャンマー人のボランティア教師は 3 名である。火曜日の授業には日本人のボランティア教師が 1 時間授業を担当し、土曜日と日曜日の授業にも日本人のボランティア教師数

名がアシスタントとして会話の練習などに参加している。仕事の都合などによって参加できない場合もあり、全ての回に日本人ボランティア教師がいるというわけではない。以下は、マノーラマ僧院で日本語を教えている3人のミャンマー人教師の紹介である。

#### ✧ ミャンマー人教師 A

A 先生はマノーラマ僧院で7年ほどボランティア教師をしており、担当は土曜日と日曜日にある初級の授業である。日本語を勉強し始めたきっかけは、子供のころにテレビで見た日本の映画で、そこから日本の生活に興味を持ち始めたという。A 先生自身、8年間ほど別の僧院で日本語を勉強したことがあり、その頃はガイドとして働いていた。しかし、現在は自分の日本語学校で日本語教師をしながら、休日にマノーラマ僧院で教えている。自分自身も僧院で勉強したことがあり、そのおかげで今日本語を使って仕事をする事ができているため、他の人もそうなれるように助けたいという思いからボランティア教師をしているという。これまで国際交流基金がミャンマーで現地の日本語教師向けに開催するセミナーに10回ほど参加したことがあり、教授法はそこで習ったという。

#### ✧ ミャンマー人教師 B

B 先生は、月曜日と火曜日にある初級の授業を担当している。ヤンゴン外国語大学の日本語学科を卒業し、現在は自宅で日本語教室を開いているという。

#### ✧ ミャンマー人教師 C

C 先生はマノーラマ僧院で3年ほどボランティア教師をしており、土曜日と日曜日にある中上級の授業を担当している。C 先生自身、10年以上前にマノーラマ僧院で英語を勉強していたが、たまたま早く僧院に到着したときに日本語の授業がやっていたため見学したところ、日本語の音が優しくてきれいで、自分にもできるかもしれないと思ったことから勉強を開始したという。今は会社員として働きながら日本語の通訳をしている。自身がマノーラマ僧院で勉強していたことから、恩返しや情としてボランティアを始めたという。国際交流基金が日本で実施している外国人日本語教師のための研修プログラムや、以前来ていた日本人の日本語教師から教授法を学んだという。C 先生の授業は午後5時～6時半までだが、学習者がなかなか帰ろうとしないため8時まで延長して授業をしている。他の授業の期間は3か月だが、C 先生の授業には期間が定められておらず、終わることがないという。

### ➤ 学習者

#### ✧ 所属

マノーラマ僧院での日本語学習者は男女ともにおよそ半分ずつで、主に大学生や会社員が多かった。大学生では英語を専攻している人、会社員では旅行会社で働いている人、銀行で働いている人、日系のIT企業で働いている人など専攻や業種は様々であった。

#### ✧ 学習期間

授業が4週間前に新しいタームに入ったため、初級の学習者は学習期間が4週間という人が多かった。また、1回初級の授業を受講したがもう一度受けなおしているという学習者(3か月間)という人もいた。中上級になると1年以上という人が多く、中には2年以上という人もいた。

#### ✧ 学習動機

全体的に日本のアニメや漫画などのサブカルチャーが好きで勉強し始めたという学習者は少なかったように感じる。日系企業で働きたい／日本語を使って仕事がしたいという学習者が比較的多かったが、以下に挙げるように学習目的は多様であった。

- ✓ 外国語を勉強することに興味があったから
- ✓ 日本語のガイドになりたいから
- ✓ 自動車について勉強したいから
- ✓ 昔日本が発展したように、日本の技術をミャンマーに持ち込んで国を発展させたいから
- ✓ 子供のころ祖父が日本語を教えてくれたが、今はあまり覚えていないから
- ✓ 日本のゲームのようなものを自分で作りたいから
- ✓ キャビンアテンダントになりたいから



土曜日と日曜日の初級クラス



月曜日と火曜日の初級クラス



土曜日と日曜日の中上級クラス



土曜日と日曜日の中上級クラス：スピーチ発表

## 5.2. WBMI (World Buddhist Meditation Institute)

### ➤ 僧院

WBMI は 1988 年に設立された僧院で、英語・日本語・中国語・韓国語を教えている。ヤンゴンで一番初めに日本語を教え始めた僧院だという。以前はタイ語やフランス語も教えていたが、現在



はない。最盛期には 300 名ほどの学習者がいたが、僧院を設立したお坊さんが 10 年ほど前に亡くなられたことで、学習者の減少や僧院学校の規模も縮小してきているという。現在は亡くなられたお坊さんの親戚のお坊さんが僧院を継ぎ、外国語教室を統括しているのは亡くなられたお坊さんの親戚で、その方の奥様はミャンマー語の博士を取得された方だという。日本語も話すことができ、初級を教えている。ネイティブの教師がいるのは日本語の授業のみで、他の外国語は全てミャンマー人の教師が教えている。

## ➤ 日本語の授業

土曜日に 1 つ、日曜日に 4 つの授業が開講されている。授業のレベルは初級から中上級で、それぞれの授業は 1 時間～2 時間ほどである。以前は月曜日と水曜日にも開講されていたが、現在はない。授業の開始は 1 月から 11 月までで、その年の 12 月の日本語能力試験を受験することを目標にしている。

ミャンマー人の教師が担当する初級の授業では語彙の学習が主で、日本人のボランティア教師が担当する上級の授業では昔の暦の読み方や国語辞典の使い方などの日本文化の紹介、会話の練習などがなされている。

## ➤ 教科書

筆者が見学した授業には教科書はなく、教師が各自で作成した語彙シートやプリントが配布されていた。スマートフォンを持っている学習者が多く、日本語学習アプリを副教材として使っている場合も見られた。

## ➤ 教師

日本語を教えているミャンマー人の教師は初級に 4 名、中級に 1 名いる。WBMI は古くからヤンゴンの日本人学校と共同で日本語の授業を開講しているため、日曜日の授業は多数の日本人ボランティア教師が教えている。そのうちの半分はヤンゴンの日本人学校の教師で、もう半分はヤンゴンの日系企業や現地企業で働く人々である。

## ☆ ミャンマー人教師 A

A 先生は、最近から中級のクラスを担当し始めたという。これまで国際交流基金などのセミナーに参加したことはなく、自分で考えながら教えているという。大学では化学を専攻していたが、日本の柔道や武士道に興味があったため、自分で本を読んで勉強するようになったという。大学を卒業してから、ヤンゴン外国語大学の日本語学科のディプロマコースに通い始め、同時に僧院でも日本語を勉強していた。日本に行ったことはないが、マレーシアで 2 年、ドバイで 7 年働いていた時は日本人と働く機会もあり、帰国してからは日本語ガイドのアルバイトなどもしていたことがあるという。現在仕事はしておらず、1 年ほど前から始めた英語－日本語－ミャンマー語辞典（1 万語ほど）の制作に取り組んでいる。最近は多くのミャンマー人実習生が日本へ行っているの、その通訳として日本へ行きたいと考えている。

## ➤ 学習者

#### ◇ 所属

学習者は女性が多く、男性が少なかった。画家という人もいたが、ほとんどは会社員で、上級クラスの学習者では旅行会社や日系企業で働いているという人が多かった。日系企業で働いている学習者は日本人と話す機会も豊富で、流暢に会話できるレベルの人が数多くいた。また、ヤンゴン外国語大学日本語学科のディプロマコースで勉強しながら、さらに WBMI で日本語の授業を受講しているという人もいた。WBMI は定期的に日本人のボランティア教師が来るため（共催の日本人学校でスケジュールが組まれている）、ネイティブとの会話を求めて来ている学習者も多いようだった。

#### ◇ 学習期間

初級のクラスでは 1 年ほどという学習者が最も多かった。上級になると 5 年ほどという学習者が何名もいた。

#### ◇ 学習動機

WBMI でも学習者の日本語学習のきっかけ・動機は多様だった。

- ✓ 日本人が好きだから
- ✓ 日本へ行きたいから（鎌倉に行きたい）
- ✓ ガイドになりたいから
- ✓ 最初は英語を勉強していたが、日本語の授業もあると聞いて
- ✓ 最初は中国語を勉強していたが、発音が難しくて日本語にした
- ✓ 日本の品質の良いものを見て、日本に興味を持った
- ✓ 子供のころ、剣道の先生が侍の話をたくさん聞かせてくれて興味を持った
- ✓ 転んで足から血を出したときに日本人が助けてくれた

#### ◇ 今後の目標

日本語の勉強を続けて、今後どのような目標を達成したいのかを尋ねてみた。

- ✓ 上手に話せるようになって仕事に生かしたい（旅行会社勤務）
- ✓ 仕事で営業ができるようになりたい（日系企業勤務）
- ✓ ボランティアとして日本語を教え、恩返しをしたい（地方都市パイで日本人が開講している無料の日本語教室で学び、現在はヤンゴンの日系企業勤務）



中級クラス



自習時には学習期間の長い学習者が教えている

### 5.3. ダマラキタ僧院

#### ➤ 僧院

ダマラキタ僧院は 20 年ほど前に設立され、英語・日本語・中国語・スペイン語が教えられている。語学学校の他に世俗教育も行っており、近隣に住む子供たちが通っている。ダマラキタ僧院を設立したお坊さんは自分で日本語を勉強し、仏教関連で日本へ 2 回ほど行ったこともあるという。

#### ➤ 日本語の授業

日本語の授業は木曜日、金曜日、土曜日、日曜日に開講されている。レベルは初級で、教科書の語彙・文法理解が中心である。

#### ➤ 教科書

教科書は海外産業人材育成協会（AOTS）の「日本語の基礎」が使用されていた。以前、日本人の教師の授業があったときに使用していたものだという。

#### ➤ 教師

ミャンマー人の教師が 5 名おり、日本人の教師はいない。

#### ✧ ミャンマー人教師 A

A 先生は初級の授業を担当している。もとはいろいろな僧院でお坊さんになるために修行していたが、厳しい規律があることからお坊さんになるのをやめ、3 年前からダマラキタ僧院に住み込みで日本語を教えている。日本人も仏教徒であることから日本語を勉強し始め、これまでに日本人の教師から 5 年ほど日本語を習っていたという。日本語能力試験の N3 を有している。暇なときにはいつも日本語を勉強しているようで、知っている語彙や漢字の数は多いが、話す機会がないため会話が苦手だという。将来は日本で働きながら、大学で学びたいという。

#### ➤ 学習者

平日のクラスには学習者が 5 名、休日のクラスには 25 名ほどいる。平日は 30 代、休日は学生など若い学習者が多い。日本で働きたいと考えている人が平日のクラスにはおり、エージェントを通して実際に 4 月から日本に実習生として派遣されるという人もいた。





## 6. 年少者向けの日本語教室の実践

今回の調査では年少者が外国語を学んでいる僧院学校を見つけることができなかったため、日本や日本人との関連がありそうな僧院付属学校を現地の人から紹介してもらい、そこで実施することにした。訪問したのは、ヤンゴンの中心部からバスで一時間ほどの郊外にあるスータウンピー僧院付属学校兼孤児院である。日本の企業やロータリークラブからの支援によって校舎が建設されたり、電気や水道が整備されたりしたという。孤児院で生活している生徒は3歳から19歳までの668名で、男子が140名、女子が420名以上だという。このほかにも近隣の自宅から通ってきている生徒もいる。また、カレン族やシャン族といった少数民族の子供たちもいる。

今回この孤児院では、紙芝居の読み聞かせとお手玉やけん玉といった日本の遊び、折り紙を紹介した。紙芝居は、「おむすびころりん」や「一寸法師」といった分かりやすくて学びのある日本の昔話、そして仏教徒の多いミャンマーの子供たちに少しでもより良く伝わるように「三枚のお札」を選んだ。日本語のできる通訳を探したが見つからず、また僧院のお坊さんたちや孤児院の子供たちにも英語がほとんど通じなかったため、日本語だけでのコミュニケーションになってしまったが、テレビ画面のような紙芝居に子供たちの眼差しは釘付けで、好奇心に満ち溢れているように感じた。また遊び道具があまりないようで、初めて見るお手玉やけん玉、こまは大人気だった。しかし、子供たちはいつも自分たちでいろいろと考えながら身近なもので工夫を凝らして遊んでおり、折り紙がなくなってしまったときも捨てられていた新聞紙を持ってきて折り始めていた。筆者自身も身近なものでどのようにして子供たちに日本の文化を伝えられるか、楽しんでもらえるかを考えていかなければならないと感じた。また、言葉が通じなくても何をするのかをしっかりと考えれば子供たちは興味を示し続けてくれることを実感し、大人への日本語教育より工夫を凝らさなければならぬところがさらに難しいところだと感じた。



「一寸法師」に興味津々の子供たち



お手玉で遊ぶ女の子



折り紙を折る子供たち



新聞紙で作った兜とグローブ

## 7. 終わりに

調査を通して、特に教科書と会話の機会の不足が伺えた。無償で教育を提供している僧院学校は、新しく種類豊富な教科書・教材を調達することがなかなか難しい。筆者の大学では、交流のある海外の大学の日本語学習者のために日本語の書籍などを集めて送ったりしているが、ミャンマーの僧院で学ぶ日本語学習者のためにも同様のことができれば良いと考えた。また、コンピューター室を備えた僧院もあるので、オンラインで学べるサイトなども紹介すると良いかもしれない。多くの学習者もスマートフォンを持っているので、日本語学習のためのアプリなども活用してもらいたい。会話の機会を増やすことはなかなか難しいことかもしれないが、今回筆者の調査中に日本から学生団体が僧院を訪問していたように、ミャンマーに関心のある学生と日本語学習者を繋げられるような基盤を作れば、双方にとって良いのではないかと考えた。

当初、学習者の発話の機会が少ない講義型の授業や教科書の会話文の丸暗記などは改善していかなければならない課題のように思えたが、ミャンマー人の友人からミャンマーの教育は暗記することが一般的であり、絶対的な存在で尊敬される教師に対して質問をする習慣がないという話を聞き、それがミャンマー人にとっての方法であるのならば変えたり改善したりする必要はないのではないかと考えるようになった。確かに、ミャンマー人教師にあらゆる教授法を紹介したりすることは有効的ではあるが、日本人のやり方を押し付けないように注意しなければならないということ、日本人の視点ばかりで判断・評価してはならないということに気づかされた。

今回の調査を通して、ミャンマーの僧院における日本語教育に携わる教師や学習者の多様性、そして彼らの真面目で志の高い姿勢を伺うことができた。特に印象に残っているのは、調査を通して「恩返ししたい」「情として」などという言葉がよく聞かれたことである。何年もボランティア教師による日本語教室が継続されているのは、このような気持ちを育む教えのある仏教を信仰する人々が多いミャンマーだからこそのことではないかと思う。今後もこのような教師や学習者が生まれ、良い循環が続いてほしいと願っている。

今回、このような貴重な調査の機会をくださった共立国際交流奨学財団のみなさま、そして突然の訪問にも関わらず快く迎えてくださった僧院の方々に心より感謝を申し上げたい。ありがとうございました。